

平成17年12月21日

環境生命工学専攻	
申請者氏名	山田 悠未

紹介教員氏名	泉田 英雄
--------	-------

論文要旨(博士)

論文題目	マレーシア華人新村研究 ―都市地域史の視点から
------	-------------------------

(要旨1200字程度)

第2次世界大戦終結とともに誕生したアジアの独立国の多くでは、1970年代頃からの外資流入による急激な工業化と都市化のなかで、農村部の貧困と都市への一極集中によるスラム、スクウォッターの問題が顕在化してきた。そのなかで、マレーシアは比較的バランスのとれた発展により、良好な住環境を維持してきており、その理由として、それ以前から地方都市という存在が確立していたということがあげられる。

大都市と農村のあいだ、全国の幹線道路、鉄道沿い10～30キロおきに数百から数千人規模の町があらわれる。その多くは行政上、Local Authority Areaと位置づけられている。全国に700以上、至る所に見られるこれらの町は、地域、規模に関わらず、年代、形態、構成要素に共通した特徴を持っており、ある時期、なんらかの意図を持ってつくられた居住区ではないかと考えられる。

戦前からの統計、地図資料による調査の結果、これらの地方町村の成立に、1950年代前半に全国で実施された新村計画が大きく関わっていることが明らかになった。新村とは戦後に勃発した共産暴動の鎮圧を目的に計画されたスクウォッター再定住地であり、軍事的な計画目的と、4～5年という短期間に600村以上もの建設が行なわれたことから、緊急的かつ仮設的な居住区にすぎないとみなされていた。

こうした背景から、新村はこれまでの都市地域計画学において議論されることはなかったが、今日のマレーシア都市地域のありかたを理解する上で重要な要素となるものであり、都市地域史の視点から考察し、評価する必要がある。

そこで、本研究では、マレーシア都市地域史の視点から新村を再評価することを目的に、第2、3章で、マレーシア都市地域計画の歩み、新村計画に至る社会背景、計画策定経緯をまとめた。そして、第4、5章で、これまで知られていなかった計画意図、具体的な実施経緯、形態や構成要素を含めた住環境の実態を、当時の公文書の解読と、ジョホール州を中心とした詳細なフィールド調査から明らかにした。結論として、第6章で、地方都市の成立と変化を、ジョホール州をケーススタディとして考察し、その過程において新村がどのように関わってきたのかを示し、現在の地方都市のありかたに与えた影響を明らかにした。